（1）　昭和42年2月24日　国鉄東局特別委承認新聞紙　第490号
昭和40年3月8日第三種郵便物認可（毎週一回金曜日発行）　　1970年1月9日　第207号

☆反帝闘争を
プロレタリア日本革命へ！
☆プロレタリア世界革命の旗の下
共産主義者同盟に結集せよ！
共産主義者同盟

1月9日
週刊
第207号
編集発行人　鹿島　勇
一部　40円
購読料　20回500円(〒共)

戦旗

戦旗社
東京都千代田区三崎町2－7－6 商沢ビル内 電話代表03(264)2961 振替 東京36119
大阪支局大阪市都島区都島中通り3－7－16 電話06(921)1457
京都支局京都市左京区下鴨宮崎町128－29(新)〒(711)0025
名古屋支局052(732)3553

1月15日／成田三里塚闘争
17日／社学同総決起集会
〃／全東海政治集会
18・19日／東大安田戦一周年集会

七〇年代過渡期世界の危機を内戦へ
世界革命戦争と世界プロ独の勝利へ

「疎外革命論」「危機論・戦略主義」を止揚し、革命党の七〇年代闘争へ

□共産主義者同盟政治局□

今日本の革命的闘争は、10・8羽田闘争を頂点とする1969年の闘いを通して、10・11、11・12佐藤訪米阻止闘争、11・16沖縄「返還」粉砕闘争、11・22安保粉砕闘争、11・26三里塚闘争、11・28日韓粉砕闘争、11・29沖縄闘争、12・4日韓粉砕闘争、12・8羽田闘争、12・10佐藤訪米阻止闘争、12・14沖縄「返還」粉砕闘争、12・20三里塚闘争、12・22日韓粉砕闘争、12・25沖縄闘争、12・28日韓粉砕闘争、12・31沖縄闘争、1・3日韓粉砕闘争、1・4沖縄闘争、1・5日韓粉砕闘争、1・8沖縄闘争、1・9日韓粉砕闘争、1・10沖縄闘争、1・11日韓粉砕闘争、1・12沖縄闘争、1・14日韓粉砕闘争、1・15沖縄闘争、1・16日韓粉砕闘争、1・17沖縄闘争、1・18日韓粉砕闘争、1・19沖縄闘争、1・20日韓粉砕闘争、1・21沖縄闘争、1・22日韓粉砕闘争、1・23沖縄闘争、1・24日韓粉砕闘争、1・25沖縄闘争、1・26日韓粉砕闘争、1・27沖縄闘争、1・28日韓粉砕闘争、1・29沖縄闘争、1・30日韓粉砕闘争、1・31沖縄闘争、2・1日韓粉砕闘争、2・2沖縄闘争、2・3日韓粉砕闘争、2・4沖縄闘争、2・5日韓粉砕闘争、2・6沖縄闘争、2・7日韓粉砕闘争、2・8沖縄闘争、2・9日韓粉砕闘争、2・10沖縄闘争、2・11日韓粉砕闘争、2・12沖縄闘争、2・13日韓粉砕闘争、2・14沖縄闘争、2・15日韓粉砕闘争、2・16沖縄闘争、2・17日韓粉砕闘争、2・18沖縄闘争、2・19日韓粉砕闘争、2・20沖縄闘争、2・21日韓粉砕闘争、2・22沖縄闘争、2・23日韓粉砕闘争、2・24沖縄闘争、2・25日韓粉砕闘争、2・26沖縄闘争、2・27日韓粉砕闘争、2・28沖縄闘争、3・1日韓粉砕闘争、3・2沖縄闘争、3・3日韓粉砕闘争、3・4沖縄闘争、3・5日韓粉砕闘争、3・6沖縄闘争、3・7日韓粉砕闘争、3・8沖縄闘争、3・9日韓粉砕闘争、3・10沖縄闘争、3・11日韓粉砕闘争、3・12沖縄闘争、3・13日韓粉砕闘争、3・14沖縄闘争、3・15日韓粉砕闘争、3・16沖縄闘争、3・17日韓粉砕闘争、3・18沖縄闘争、3・19日韓粉砕闘争、3・20沖縄闘争、3・21日韓粉砕闘争、3・22沖縄闘争、3・23日韓粉砕闘争、3・24沖縄闘争、3・25日韓粉砕闘争、3・26沖縄闘争、3・27日韓粉砕闘争、3・28沖縄闘争、3・29日韓粉砕闘争、3・30沖縄闘争、3・31日韓粉砕闘争、4・1沖縄闘争、4・2日韓粉砕闘争、4・3沖縄闘争、4・4日韓粉砕闘争、4・5沖縄闘争、4・6日韓粉砕闘争、4・7沖縄闘争、4・8日韓粉砕闘争、4・9沖縄闘争、4・10日韓粉砕闘争、4・11沖縄闘争、4・12日韓粉砕闘争、4・13沖縄闘争、4・14日韓粉砕闘争、4・15沖縄闘争、4・16日韓粉砕闘争、4・17沖縄闘争、4・18日韓粉砕闘争、4・19沖縄闘争、4・20日韓粉砕闘争、4・21沖縄闘争、4・22日韓粉砕闘争、4・23沖縄闘争、4・24日韓粉砕闘争、4・25沖縄闘争、4・26日韓粉砕闘争、4・27沖縄闘争、4・28日韓粉砕闘争、4・29沖縄闘争、4・30日韓粉砕闘争、5・1沖縄闘争、5・2日韓粉砕闘争、5・3沖縄闘争、5・4日韓粉砕闘争、5・5沖縄闘争、5・6日韓粉砕闘争、5・7沖縄闘争、5・8日韓粉砕闘争、5・9沖縄闘争、5・10日韓粉砕闘争、5・11沖縄闘争、5・12日韓粉砕闘争、5・13沖縄闘争、5・14日韓粉砕闘争、5・15沖縄闘争、5・16日韓粉砕闘争、5・17沖縄闘争、5・18日韓粉砕闘争、5・19沖縄闘争、5・20日韓粉砕闘争、5・21沖縄闘争、5・22日韓粉砕闘争、5・23沖縄闘争、5・24日韓粉砕闘争、5・25沖縄闘争、5・26日韓粉砕闘争、5・27沖縄闘争、5・28日韓粉砕闘争、5・29沖縄闘争、5・30日韓粉砕闘争、5・31沖縄闘争、6・1日韓粉砕闘争、6・2沖縄闘争、6・3日韓粉砕闘争、6・4沖縄闘争、6・5日韓粉砕闘争、6・6沖縄闘争、6・7日韓粉砕闘争、6・8沖縄闘争、6・9日韓粉砕闘争、6・10沖縄闘争、6・11日韓粉砕闘争、6・12沖縄闘争、6・13日韓粉砕闘争、6・14沖縄闘争、6・15日韓粉砕闘争、6・16沖縄闘争、6・17日韓粉砕闘争、6・18沖縄闘争、6・19日韓粉砕闘争、6・20沖縄闘争、6・21日韓粉砕闘争、6・22沖縄闘争、6・23日韓粉砕闘争、6・24沖縄闘争、6・25日韓粉砕闘争、6・26沖縄闘争、6・27日韓粉砕闘争、6・28沖縄闘争、6・29日韓粉砕闘争、6・30沖縄闘争、7・1日韓粉砕闘争、7・2沖縄闘争、7・3日韓粉砕闘争、7・4沖縄闘争、7・5日韓粉砕闘争、7・6沖縄闘争、7・7日韓粉砕闘争、7・8沖縄闘争、7・9日韓粉砕闘争、7・10沖縄闘争、7・11日韓粉砕闘争、7・12沖縄闘争、7・13日韓粉砕闘争、7・14沖縄闘争、7・15日韓粉砕闘争、7・16沖縄闘争、7・17日韓粉砕闘争、7・18沖縄闘争、7・19日韓粉砕闘争、7・20沖縄闘争、7・21日韓粉砕闘争、7・22沖縄闘争、7・23日韓粉砕闘争、7・24沖縄闘争、7・25日韓粉砕闘争、7・26沖縄闘争、7・27日韓粉砕闘争、7・28沖縄闘争、7・29日韓粉砕闘争、7・30沖縄闘争、7・31日韓粉砕闘争、8・1沖縄闘争、8・2日韓粉砕闘争、8・3沖縄闘争、8・4日韓粉砕闘争、8・5沖縄闘争、8・6日韓粉砕闘争、8・7沖縄闘争、8・8日韓粉砕闘争、8・9沖縄闘争、8・10日韓粉砕闘争、8・11沖縄闘争、8・12日韓粉砕闘争、8・13沖縄闘争、8・14日韓粉砕闘争、8・15沖縄闘争、8・16日韓粉砕闘争、8・17沖縄闘争、8・18日韓粉砕闘争、8・19沖縄闘争、8・20日韓粉砕闘争、8・21沖縄闘争、8・22日韓粉砕闘争、8・23沖縄闘争、8・24日韓粉砕闘争、8・25沖縄闘争、8・26日韓粉砕闘争、8・27沖縄闘争、8・28日韓粉砕闘争、8・29沖縄闘争、8・30日韓粉砕闘争、8・31沖縄闘争、9・1日韓粉砕闘争、9・2沖縄闘争、9・3日韓粉砕闘争、9・4沖縄闘争、9・5日韓粉砕闘争、9・6沖縄闘争、9・7日韓粉砕闘争、9・8沖縄闘争、9・9日韓粉砕闘争、9・10沖縄闘争、9・11日韓粉砕闘争、9・12沖縄闘争、9・13日韓粉砕闘争、9・14沖縄闘争、9・15日韓粉砕闘争、9・16沖縄闘争、9・17日韓粉砕闘争、9・18沖縄闘争、9・19日韓粉砕闘争、9・20沖縄闘争、9・21日韓粉砕闘争、9・22沖縄闘争、9・23日韓粉砕闘争、9・24沖縄闘争、9・25日韓粉砕闘争、9・26沖縄闘争、9・27日韓粉砕闘争、9・28沖縄闘争、9・29日韓粉砕闘争、9・30沖縄闘争、10・1日韓粉砕闘争、10・2沖縄闘争、10・3日韓粉砕闘争、10・4沖縄闘争、10・5日韓粉砕闘争、10・6沖縄闘争、10・7日韓粉砕闘争、10・8羽田闘争に次ぐ11・12第二次羽田闘争、68年1月エンプラ闘争とこれを基礎とした反戦全学連の影響力の一挙的拡大、3月王子野戦病院闘争と大衆の発力闘争への参加、三里塚闘争における農民との結合とこれら一切を総合した10・21中核派力闘争一防衛庁攻撃とこれを頂点とする新宿、御堂筋等、全国各地における街頭制圧闘争への外化、浸透としての学生戦線における自例的な全共闘運動の創出、全国的規模占拠、武器の拡大、高度化、そしてこれらを基礎とした10・8羽田闘争における街頭制圧闘争への外化、浸透としての学生戦線における自例的な全共闘運動の創出、全国的規模占拠、武器の拡大、高度化、そしてこれらを基礎とした10・21中核派力闘争一防衛庁攻撃とこれを頂点とする新宿、御堂筋、筋等、全国各地

15日 18日

成田三里塚 東大一周年 闘争に総結集を

反帝統一戦線の総力を成田へ

「恒常的武装闘争の七〇年」の火蓋を

成田・東大で70年代の幕明けを

昨年十二月十九日に開かれた全国共闘連合第二回大会は、70年の闘争を命運を賭ける闘いと規地反対同盟の呼びかけに応えた二月中旬三里塚闘争、十八日東大安田戦一周年決戦集会の決定とが、これに続いて翌二十日の全国闘争代表者会議に於ても、三里塚闘争に総力を集中することが決定された。

いよいよ70年代闘争への歴史的第一歩が踏み出されようとしている。

かえりみれば、敵階級は、東大安田闘に於てさえの頂点にのぼりつめた「二つの羽田」以降の反帝統一戦線に対する攻撃、半金法的武装闘争の波を行政権力の一機構たる機動隊の準軍隊化と結託して4・28、ASPACへ、大学立法決戦、十、十一月闘争を通じて分解、制圧することに成功してきたかのようにほざくが、少くとも敵階級はそのように信じこうもうとしている（年末に発表された公安調査庁の報告）。

かかる「制圧」の上に立って敵階級は、反帝統一戦線の撃滅を狙い、公安、沖縄、三里塚への総攻撃に移行せんとしている。すでに、九月十三日の段階で、新聖書国際空港闘争から運動盲に提出されていた生産取用法の強制裁定が、十、十一月闘争後の十二月十六日になって決定され本年に入って三つの国際小屋と一坪共有地への立入調査が強行されようとしているのはこれを如実に示している。

だが、敵階級のかなる「自信」がまったくの思い上がりに過ぎないことを、われわれ事実をもって突きつけずにはおかない。

敵階級が「三つの羽田」以降の「組織された暴力」と「プロレタリア国際主義」とを、基本的には行政権力機構の肥大化をもって解体せんとしてきたことは、逆に「プロレタリア国際主義」の側から「組織された暴力」をより一層力強く鍛えあげざるを得なかった。ベトナム反戦から、安保闘争の高揚、沖縄闘争、成田闘争、東大闘争、NATOその他一切の帝国主義の侵略、反帝統一戦線の再編成、革命的左翼の再結集、日韓条約粉砕闘争、三里塚闘争、東大闘争を闘いぬこうとしている。

昨秋、革命的左翼とわれわれ部分は檀君の軍事組織の形成の段階に到達した。もちろんこの発展は革命の果実から見れば未だ微々たるものである。だが、その背後には、帝国主義軍隊内部の反乱（八月三日、沖縄軍金武労の戦闘）がある。敵階級が現在拠っている行政権力機関内部の官公労を中心とした反戦労働者の「はね出し労働運動」、ソビエト連邦の革命がある。60年安保当時とは異なり、発展途上人民諸国の「ベトナム侵略反対」、ベトナム人民の武装をめぐる統一戦線の再編成、72年沖縄自衛隊派兵をもってアジア侵略をはかろうとする敵階級に対して三大陸人民の武装をめぐる統一戦線の再編の連打となんらの「間隙」なく、そうとする敵階級に対して三大陸人民の武装をめぐる統一戦線の再編の連打となんらの「間隙」なく、そうとする敵階級に対して三大陸人民の武装をめぐる統一戦線の再編の連打となんらの「間隙」なく、

「組織された暴力」＝反帝統一戦線は、全く新しい質的飛躍の時代を迎えさせるのだ。

かかる反帝統一戦線の結合飛躍帝国主義の侵略、反革命と世界革命戦争をめぐる統一戦線の再編成の第一歩として三里塚、東大闘争を闘いぬこうとしている。

昨秋、革命的左翼とわれわれ部分は檀君の軍事組織の形成の段階に到達した。もちろんこの発展は革命の果実から見れば未だ微々たるものである。だが、その背後には、帝国主義軍隊内部の反乱（八月三日、沖縄軍金武労の戦闘）がある。敵階級が現在拠っている行政権力機関内部の官公労を中心とした反戦労働者の「はね出し労働運動」、ソビエト連邦の革命がある。60年安保当時とは異なり、発展途上人民諸国の「ベトナム侵略反対」、ベトナム人民の武装をめぐる統一戦線の再編成、72年沖縄自衛隊派兵をもってアジア侵略をはかろうとする敵階級に対して三大陸人民の武装をめぐる統一戦線の再編の連打となんらの「間隙」なく、

成田＝沖縄と並ぶ侵略前線基地

三里塚空港の設置の階級的侵略をはっきりのように暴露される。

第一に、それは十二月一十二日の米軍基地二十五カ所の「返還」（95・5%は自衛隊移管・米軍専事駐留）、同二十四日の民間航空会社、米空軍、航空自衛隊三者による航空管制の統一（世界で初めて）などの日米共同反革命新時代に向け、羽田空港（ベトナム侵略基地）では果たし得ない、その軍事的保障として打出されている。

第二に、現在計画されている北海道、東北、中部、大阪の新空港設置とともに、太平洋ベルト地帯から沖縄（72年自衛隊二十八個兵団）に至る日帝のアジア侵略、反革命の大動脈の中心的拠点建設と他ならないこと。

第三に、この大動脈建設は、「新全総計画」として、労働者農民（総評傘下）をはじめ地域全住民を利用、収奪する現代資本主義国家的規模の合理化として、個別資本にとってはまた飽既的合理化の保障をつくりだす計画の一環だが、なる三百兆円（現在の国民総生産の二百年分）の発展とともに、太平洋ベルト地帯＝沖縄＝東北＝北海道の大動脈の建設と、この大動脈の破壊、分散化とが、「東京＝成田間空港間の二百分の一構想」にまさにたいしており、資本の保障をつくりだす計画の一環だが、なる三百兆円の発展とともに、太平洋ベルト地帯＝沖縄＝東北＝北海道の大動脈の建設と、この大動脈の破壊、分散化とが、「東京＝成田間空港間の二百分の一構想」にまさにたいしており、資本

自衛隊解体 赤軍建設へ 全人民の組織化始まる

12・28 「第二第三の小西を！」 東京行動委 結成さる

「組織された暴力」という宣伝が、いがまさしくそのようなものであり、だからこそ小西三郎が登場したのであり、彼に対する弾圧に対抗して、我々が逆に自衛隊解体・赤軍建設の闘いを押し進めていこうとすることができるのである。

現在小西三郎をめぐる敵階級の攻撃は、我々の闘いを押し進めていこうとすることができるのである。

第四に、以上のような三里塚決戦の性格はいわば「持久戦」的性格とならざるを得ない。二月の立入り測量、そしてひき続く強制収用を粉砕しめて「決戦」は、その

メッセージ

本日、ここに結集されたすべての闘う同志諸君！

檀力は本当に11月1日を選挙し、24日起訴しました。私は私の以心と信ずるところを貫いて闘ってきました。

20数年前、霧雨学園隊として発足した自衛隊は以来、脅々とその武装を強化し、現在では世界有数の戦力を誇っています。船田発言、桜田発言、あるいは今度の日米共同声明に見られるように、70年代、日本帝国主義は遮来と軍事アジアに進出しての様相を、次第に明確にしています。

又、70年代闘争の激化に従い、その体制を強化しようとしています。

航空自衛隊佐渡基地 所属三等空曹 小西誠

（三）

戦争、世界革命戦争の戦略的に展望しつつ、端緒的武装闘争から「武装闘争」へと「発展」する前提との紙面を比較と場合、学生組織委員会、学生組織委員会、ないしは、社学同書記局委員会の論文が圧倒的に少なくなっていることに、すぐ気が付くはずである。それは学生闘争＝革命的組織の闘いが、革命運動と革命そのものの根本を問うものとして進展した以上、たとえその現実的担い手が、これまでに増して重要なものであることは、全く当然のことである。しかるに、それは、レーニン・ボルシェビキの全国政治闘争がますますドン・キホーテよりレーニンの革命闘争の一環として、「蜂起」のための組織化が依拠しつつ行なわれねばならない。党への結集を呼びかけすべく、戦闘への決起をのみ称する戦闘派は、必ずや先進的大衆にツッポを向けられるであろう。戦争は、ますますもって徹底的に「組織」されていくのと同じく、「戦闘」の決起をのみ称する戦闘派は、必ずや先進的大衆にツッポを向けられるであろう。戦争は、ますますもって徹底的に「組織」されていくのと同じく、「戦闘」の決起をのみ称する戦闘派は、必ずや先進的大衆にツッポを向けられるであろう。

中央軍が光が革命戦線が発刊しといった旋廻にとっては解決不能な論争を繰り返さざるをえないのである）

後者に関しては、われわれは、レーニンの革命闘争や、革命組織の発展に関しては、ボルシェビキの全国政治闘争の一環として、「蜂起」のための組織化が依拠しつつ行なわれねばならない。党への結集を呼びかけすべく、戦闘への

当面する労働運動の任務について

反レ・パを政治闘争として闘い抜き、七〇年春闘に進撃せよ！

共産主義者同盟中央労対部

反戦派労働運動の到達地平と諸党派

68年初頭を迎にむかえる羽田闘争を経た佐世保闘争の中で迎え、69年初頭を迎えた戦闘的春闘、学生は今、70年初頭を10・11月安保決戦の荒々しい歴史的闘争を生き抜いて、ブルジョアジーの親復的攻撃、三里塚決戦の中で迎えようとしている。

我が反戦派労働者は、この67年闘開の中で、着実にその歩みを続けて来た。とりわけ、社・共以外の左翼潮流の同盟化が、我々が国際主義と組織された暴力の下切り開いた地平にまで推進する過程で、反戦派労働者総結集をもたらし、やっと同盟労働運動を左から揺撼する位置に立し、単なる左翼反対派的な民間労働運動を生産する過程で、自から歴史の主人公としてのほこりと自信に満ちた第一歩を踏み出すに至ったのである。

だが、それはこの10・11月安保決戦の過程、総体としてはやっとその第一歩を踏み出したにすぎない。「反戦派労働運動」の内容最開、実践的方針は単に自ヘル反戦の拡大のためのプラマキ的闘争、実践的方針は

獄中の同志からの「年頭アピール」

党の革命を推進し七〇年ブント構築で世界革命へ

共産同盟議長　さらざ徳一（東拘在監）

日本の戦争を主体的に切り拓いて三プロック戦闘拠点を世界革命戦争へケン引し同時勝利の砲煙の中から世界プロ独裁を固いとる七〇年代を迎え、全国の同志諸君党正規軍ならびに反帝戦線赤ヘルの革命戦士諸君に熱烈の挨拶を送る。

我同盟は11月決戦を闘い抜く中で生れ変った。60年ブントの遺産を背負ったブントから第六次ブントへと歩む闘う党へ70年ブントへと歩む闘う党へ。党は70年ブントへと党を革命に70年代の闘争を闘い抜いたのである。この飛躍した党の革命主体が4・28闘争を吹き飛ばし、権力闘争の壁をこえて11月決戦を最前線に突出し指揮団の正面戦を闘い抜いたのである。

党の革命は、党の内閉党としてあるのではなく、燃焼する火炎と硝煙の武装闘争の中に確実に貫徹されてはじめて実現され確認されるのである。党の革命は、綱領やオシャベリの中でつくり出されるのではなく、武装蜂起への質を内包した現実の権力闘争の中で耐えうる力者を検証されることによってはじめて指導と下部に判断されるのである。

かつてのブルジョア民主主義の軍人であったフォン・ビスマルクが「政治は鉄と血によって解決される」と言ったように、革命は武装闘争によって判断されるのである。だが、六九年闘争の敗北と六六年ベトナム闘争の不充分性にもかかわらず、我々がさこの革命の展望を確実にする機会を逸して不思議なことではない。その第一の根拠は「赤軍派」との党内闘争を通じて獲得されつつある「党の革命」である。

もし我々が「党の革命」を掲げ、六九年闘争の不充分性にもかかわらず、我々がさこの革命の展望を確実にする機会を逸して不思議なことではない。その第一の根拠は「赤軍派」との党内闘争を通じて獲得されつつある「党の革命」である。

もし我々が「党の革命」を掲げ、六九年闘争の不充分性にもかかわらず、我々がさこの革命の展望を確実にする機会を逸して不思議なことではない。その第一の根拠は「赤軍派」との党内闘争を通じて獲得されつつある「党の革命」である。

そして我々の未来が確実に勝利を約束されている第二の根拠は、日本社会主義運動の歴史に決定的な大転換を画期的に刻印した「赤軍派」の敢闘である。

「赤軍派」は、六九年闘争の敗北を総括し、日本社会主義運動の歴史的